

## 第11回ユネスコスクールSDGsアシストプロジェクト

助成金利用報告書(申請年度:2019年度、実施年度:2020年度～)

学校名	特定非営利活動法人横浜シュタイナー学園
助成プロジェクト名	循環型社会理解の基礎となる体験型「暮らしと仕事」学習プロジェクト
主な教科領域等	教科領域(国語・算数・理科・生活・社会・家庭)
キーワード いずれかに○をして下さい	環境学習、国際理解、平和・人権、世界遺産・地域遺産学習、防災・減災教育、気候変動 その他( ) (複数回答可)
助成活動に参加した生徒数	第3学年13人 第4学年20人(複数可)
その他の参加者数	地域住民・保護者(10人) その他(近隣のNPOほか15名)
助成活動期間	2020年4月1日～2021年7月20日
<p>■助成活動の目的・ねらい</p> <p>3年生・4年生の総合カリキュラム「暮らしと仕事」は、後のESD/SDGs学習の土台をなす学びです。牧畜や農と手工芸や土木・建築などの人の根源的な営みを実体験し、里山の循環型社会と結び付けて学びました。</p> <p>■助成活動内容</p> <p>当学園の特徴のひとつである3年生～4年生前半の総合的体験学習「暮らしと仕事」に継続プロジェクトとして取り組みました。これまで12年の試行を重ねて当学園の教育文化として定着した本プロジェクトでは、ノコギリや鉋など、暮らしを支える多くの道具を用います。消耗した道具類を更新して安全かつ安定した取り組みが行えるよう、助成を申請させていただきました。また、生活を支える衣類や食器をつくる体験プロジェクトとして、子どもの国雪印ふれあい牧場の体験費およびプロの陶芸職人の工房での体験費もあわせて申請させていただきました。</p> <p>新型コロナウイルス感染拡大に伴い、予算執行の一部を次年度に持ち越しましたが、最終的に計画した取り組みをすべて実施でき、充実した学びをもつことができました。</p> <p>■成果①児童生徒にとって、具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力を身につけたか。</p> <p>「暮らしと仕事」の学びは、自分を中心に置いた生活を人類史的な牧畜文化、農耕文化の誕生につなげ、人間の根源的な営みを身体の深いところで掴み取ることが目指されています。子どもたちはこの地域の恵まれた里山の環境を存分に味わい、手足を動かし、知恵を使って、大地から糧を収穫し、羊毛をすいて毛糸をつくり、切り出した竹を測り、切り、組み合わせせて家を建てました。そして、そのプロセスに、詩を唱え、家の安全と平和を祈念し、自然からの糧に感謝する祈りの行為を織り込むことで、子どもたちはむき出しの自然に畏怖を抱きながら、同時にそのなかに自分たちを庇護し恵みをもたらす崇高な存在を感じ取っていた古の人々の心情を追体験できました。</p> <p>私たちはそのような心情を通じた学びが、この年代の子どもたちの体験をより深いものにしていくと考え、この年代の教育の核に置いています。作業を素直に楽しむ子どもたちの姿や、完成した家のなかで居心地よさそうにしている姿、できあがった陶器を慈しむ様子は、そのような「心情の学び」に</p>	

よるところが大きいと実感しています。

■成果②教師や保護者、地域、関係機関等に対するインパクト（例えば、発表会を通じて、保護者への啓発にもつながった等）

今回、多くの体験学習には保護者が立ち会い、子どもたちの学びとその意味を肌感覚で知っていただけました。また、この学びを他のプロジェクト校と共有したいと考え、交流プログラムにも申し込みましたが、IT機器の使用を思春期以降まで待つという私たちの学びとの整合性がとれず、共有を断念せざるを得なかったのは残念でした。今後、このようなマイノリティーの存在を理解していただき、公平に機会を用意していただけたらと思います。

■自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

「変容」の項に記したように、自分たちを超越したものへの畏敬の感情や信頼の念を、活動のなかに織り込むことで、活動の質に繊細さと愛情深さが加わり、活動の成果への思いも深くなりました。その前提を支えるのは、授業全体を通じて展開される物語性です。行為の前に、先生が語る物語を通して、その行為の前提となる世界像が子どもたちのなかに豊かなイメージとして結んでいるからこそ、唱える詩に心を通わせることができ、行為に意味を見いだすことができるのです。

■今後の改善に向けた方策や展望

今回、毎年引き継ぎのなかで、家づくりの際の安全管理への配慮が十分に引き継がれなかったと感じました。事故は起きませんでした。高所の作業、刃物を使う作業などへのサポーターの配置や安全管理の確認をしていくことが課題です。